

<書評論文>

グローバリゼーション
の現在

—フランスの移民排斥問題—

Ababacar Diop, *Dans la peau d'un sans-papiers*, Paris, Seuil, 1997(<<L'HISTOIRE IMMEDIATE>>, Collection dirigée par Jean-Claude Guillebaud).

福浦 一男

移民排斥問題とは何か

近年、ヨーロッパにおける移民排斥問題がクローズアップされてきている。

フランスの「国民戦線」やドイツのスキンヘッドに代表されるような社会状況は、端的に述べるならば、グローバリゼーションの中、いわゆる国際労働移動が進行し、その結果、国民国家において実質的に一定の社会層となるに到った移民労働者階層と、従来からの国民との間にエスニシティや人種の問題が生じたものであり、排斥の圧力は移民に対する日常的な暴力の次元にまで及んでいる。

この問題に関してはいくつかの論考が存在するが、それらはあくまでも移民を受け入れる国民国家の側からの視点である。^{*1}

そうではなく、ここで排斥されている移民の側に視点を置いてみる。その重要性は以下にある。すなわち、そうすることによって、我々は、我々の社会・文化が実際には政治的に構築されてきたものだということを理解でき、その理解に基づいて、新たな社会認

識のための基底を築くための足がかりとすることができるのである。以下に紹介するのは、当の移民によって書かれた現代史の1コマに他ならない。

サン＝パピエの運動

1996年3月から8月にかけて、フランスの首都パリの2つの教会をアフリカ系移民が占拠した事件は我々の記憶に新しい。それらの事件は、それぞれ11区、18区にある教会の名前にちなんでサン＝タンブローズ教会占拠事件及びサン＝ベルナル教会占拠事件と呼ばれている。本書は、それらの事件で中心的役割を果たし、「許可証なし」"sans-papiers"（以下「サン＝パピエ」と表記）のスポークスマンと呼ばれ、現在も猶フランスにおける移民の待遇の改善を訴え活動中の、アババカル・ジョップ氏が、セネガルでの幼少時の回想から1996年末までの身の出来事を綴ったものである。近年フランスでは移民を規制する法律によって新たな移民を排除するところか、今まで合法的に滞在することができた者からもその権利をはく奪するような事態が生じ、移民排斥をイデオロギーとする極右の台頭と相まって、多くの移民は自らの社会的生存の危機にさらされている。このような状況の中、アフリカ系移民は教会占拠という行動をおこしたのである。

本書の中で中心적으로とりあげられているのは占拠の具体的過程である。したがって本書以降の出来事、具体的には1997年に入ってから成立したいわゆるドブレ法と呼ばれる移民規制法の人種差別的な側面等の問題点及びそれに対する社会の反応、さらには首相の交代によるコアビタシオン（保革共存）については本書の中ではとりあげられていない。本書

を構成する複数のコンテキストの中で特に紹介しておきたいことは、いったい移民は本国でどのように暮らしており、そしてなぜ国を離れ、そしてどのような生活を移住先で送っているのか、ということである。つまりは第2次大戦後の独立後の第3世界の具体的な内実の一例である。だがそれは一例にはとどまらない。一人のアフリカ人のライフストーリーがマクロな歴史そのものであるような事態がここで生じているからだ。

以下に要約・紹介するのはフランスにおけるアフリカ人移民労働者の日常である。移民の日常性が、排斥問題を考える上での中心テーマとなるだろう。移民のトリビアルな日常を理解することによってこれまでの移民研究の弱さを克服し、当問題についてじっくり考えることこそが本論のメッセージである。

移民のライフストーリー

出身地

ジョップはセネガルの大西洋に面したフランスの植民都市、サン＝ルイで育った。

サヘル気候の乾燥した地域。農業生産性の低いこの地域は貧しく、フランスへの移民の主な部分をこの地域がなっていた。フランスの工業が彼らの労働力を必要としているからだ。しかしフランスだけが彼らの出稼ぎ先ではなかった。セネガル人は他のアフリカ諸国にも移住していた。だから、フランスに行くという考えはジョップにはあたりまえのことではなかった。

フランス語での教育が母との行き違いの原因だった。彼女はフランス語を知らなかった。彼の両親や祖父母の世代はフランスの植民地時代に育った。彼は祖父母については何も知らなかった。フランス語は学校での第一

言語だった。だから自分の国の文化よりもフランスの文化の影響を受けた。フランス語での地理、歴史、自然科学の授業を受け、放課後は親や友人とウォロフ語でしゃべっていた。フランス語がフランス在住アフリカ人同士の共通語なのはこのせいだった。

ジョップ氏は語る。「我々は植民地化のことを間接的にしか、それも断片的にしか知らなかった。」「我々の社会にかかわることの多くは沈黙のうちにあった。」「先祖がガリア人ではないということを我々は知った。じゃあいったい誰だというのだ。」

コレッジでの第6学年の時、彼は国の歴史を学んだ。植民地化に抵抗した多くの宗教の長、そしていくつかの王朝の存在を知った。先生の中にはウォロフ語で英語の授業を行う者もあり、また割礼、伝統的戦闘など、固有の文化について授業を行い始める者もいた。

サン＝ルイにはフランス文化センターがあった。そこで彼は沢山の本を読んだ。第2次大戦や1929年の恐慌の歴史をそこで知った。彼はサルトルやカミュを読んだ。

クラスの友人たちは社会主義やマルクス主義について話しはじめていた。だが、彼はいつでも具体的な問題、奨学金を獲得する困難や、食費や家賃を支払う困難をとりあげる方が良いと思った。事実、彼は学生運動には消極的だった。当時のセネガルの実状は大臣やその取り巻きが優先的に援助を受けることができるような有様だった。この時のネボティズムの教訓が彼に告げる。「フランスで、もしお前が引越すなら、そのアパートマンをアフリカ人の知り合いなら誰でもいい、そいつに譲るんだ。」

ジョップはサン＝ルイを離れてダカルに向かった。

セネガルの若者の半数以上は就職がなくそれでも彼らはちょっとした物売りでなんとかうまくやっていた。いわゆる都市インフォーマルセクターに生きる人々であった。彼らは自給自足が不可能な農村の出身だった。というのも、入植者に押し付けられた落花生のモノカルチャー経済によって主食の生産は著しくおちこんでいたのだ。

ダカルっ子は泥棒市で外国からの旅人と友人になろうとした。みんなそのコネクションを利用してフランスに行きたいと思うようになっていたのだ。ジョップにもそんな経験があった。彼がサン＝ルイまで同行したフランス人の大学教授夫妻は次のように言った。「住所を教えてあげよう。もし君がフランスにくるつもりなら、たよりをくれたまえ。」そんないいかげんな約束だが、若いダカルっ子なら皆一度はやってみるのだった。

彼は「リセ・ファイデルブ」に入学した。その時事件が起きた。政府がカザマンス地方に軍事弾圧を行ったのだ。カザマンス地方はセネガルの中でも唯一豊かな地方なのだ。ジョップはセネガル政府の政策に反対した。

ジョップはコレージュ・リセ時代を通じて地元のサッカーチームに所属しており、妻と知り合ったのもその頃だった。妻はとても厳格でフランス志向の中産階級出身だった。1987年、彼は17才で彼女は16才だった。彼女の父はフランスに滞在し、26年間軍に所属、セネガルに帰国後彼はウォロフ語を一言も話さなかったという。

ジョップは19才でフランスに渡った。

移住地

ジョップがパリに着いたのは、1988年7月24日、ツール・ド・フランスの最終日だった。

腹違いの兄弟の1人がフランスに住んでいて、ジョップは宿泊証明書 *certificat d'hébergement* を入手するために必要な手続きを彼に頼んでおいたのだった。ジョップはそれをダカルで受け取った。その証明書はビザがないと効力がなく、ビザは航空券がないと無効になってしまう。兄弟がインターポールのフランス人に頼んでくれたおかげで、彼は1カ月の短期滞在ビザを入手できた。そのビザは7月8日から有効だったから、フランス入国時には既に16日間が経過していた。

彼は当時すでにセネガル当局の監視の対象だった。

彼は片道分の航空券に95000CFAフランを支払った。これは3カ月分の給料に相当した。誰にでも支払える額ではなかった。往復の航空券は当局の目をあざむくためだった。

彼はフランスのことなどほとんど何も知らなかったし、避難権 *le droit d'asile* を申請しなければならないことを予想もしていなかった。さらにフランスの領土内に住む全ての外国人に対して滞在許可証が要求されるということすら知らなかった。

ジョップがセネガルを離れたのは、当時の政治事件に深く関係したためだ。彼は、これ以上見通しの暗い国にとどまっていたくなかったのである。

パリに来たジョップはメトロの何番線に乗ればよいかわからなかった。だが彼は幸いフランスに向かう機内で偶然若いセネガル人女性と出会った。彼女の夫を通じて彼は様々

な便宜をはかってもらえることになった。

そして2週間後ビザが切れた。ジョップ氏はパリ郊外セルジー＝サン＝クリストフの役所に難民申請をすることを決意した。そのためには、1988年のカザマンズ紛争の事件時に果たした自分の政治的役割をはっきりさせることが必要だった。

フランス難民無国籍者保護局OFPRA (Office français de protection des réfugiés et apatrides) での事情聴取は弁護士不在のまま、3人によって行われた。建物の中では沢山の人が待っていた。ザイル人、モーリタニア人、マリ人、セネガル人、そして北アフリカ人。

アフリカの国々では口頭伝承の文化があるため、当局は文書なしで意のままに被疑者を取り締まることに慣れていて、だから、国家の暴力を証明するのは非常に困難だった。それは全政治難民にとっての問題だった。というのもつまりはあらかじめ国を棄てることを決めている場合は極めてまれだったのだ。

到着して2週間後、彼は母親に300フランを送った。難民申請者には一時金1300フランが支給されたのだった。彼はメトロの定期を購入した。仕事の面接に行くためだった。ジョップは1988年11月1日から有効の労働許可証と滞在許可証を入手した。許可証のある日々がはじまったのだ。

ジョップはサッカーのおかげで仲間のツテから最初の仕事を見つけた。それは清掃夫の仕事だった。彼は社会保障に登録する。

彼は朝4時に出かけ夜10時に帰宅した。パリ中を移動した。それで月給4000フランだった。電動ほうきでの作業。極度の疲労。そして賃金の不払い。それでも彼は貯金し送金をつづけた。同僚は北アフリカ人やアフリカ人だった。夜中の2時に電話がかかってきてそ

の日の朝から仕事、ということもあった。組合はなく、スーパーの窓、学校、バス、メトロ、企業を掃除して回っていた。学歴に反する仕事だったが、それでも彼は家族に送金することができ満足した。

彼はセルジーの図書館に加入し、英小説、経済学書、哲学書、フランス文学書を読む。が、中でも歴史小説を好んだ。

雇い主は彼にきつく当たった。「今にみていろ、いつまでも仕事があると思うなよ……。」「ニグロめ。」雇い主は給料の支払いを遅らせた。彼は執行官に訴えた。驚いた雇い主はすぐに給料を彼に支払った。

こうしたなかで彼は学業を再開することを決意した。1989年1月から3カ月間、給料と一時金をつぎ込んで、彼はコンピュータのオペレーターになるための勉強をした。パリ1区のシャトレにある私立のコンピュータ学校の登録契約には、就職の約束が含まれていた。そして彼は人生の新たな段階に進むことになった。

次の仕事はアトラクションのオペレーターだった。月給は5000-6000フランにアップし、9時から17時まで、と労働条件も改善された。そこで彼は個人的な愉しみに終始するフランスのアトラクションに、文化の違いを見、驚いた。同僚には海外領土出身者や移民、英語圏アフリカ出身者がいた。1989年3月から10月までの、6カ月間の仕事だった。

次の仕事はコンピュータ・サービスの会社だった。その会社を通じてジョップはある銀行の役員を紹介された。こうして彼の世界もひろがりをみせはじめる。そして彼は本当の意味での移民の組織が存在しないことに気付いた。その当時の移民同士が互いに知り合う場合はダンスフロアやサッカー競技場しかなかったのだ。

彼の仕事はコンピュータがうまく動いているかどうかをチェックする仕事だが、そのうち、彼はプログラムがどんな風に動いているのか知りたくなった。そして彼は再び私立のコンピュータ学校でアナリスト＝プログラマーになるための勉強をはじめた。学費は40000フランだった。

彼は社会保障に金を払っているが健康なので、それを利用することはなかった。サン＝ベルナルの人々の多くは社会保障に金を払いながら滞在許可証がないため病気になったら自腹を切らねばならなかった。これは大きな矛盾だった。

この問題を訴えられた保護局の決定は、彼の立場を支持するだけの証拠がない、というものだった。だが、法に従って、さらに彼は難民請願委員会CRR(Commission des recours des réfugiés)に助けを求めることができる。事実彼はそうした。だが委員会が決定を下す日は彼のコンピュータ学校の試験と重なっていた。そして彼が不在のまま委員会の決定は下された。決定は彼の訴えの却下すなわち彼を許可証なしの立場に追いやるものだった。だが、彼はさらに国務院Conseil d'Étatに訴えることができるが、判断が下るまでには4年の歳月を要する、という。

皮肉なことに、彼はコンピュータ学校の試験に合格していた。つまり彼は仕事の資格はあっても仕事を行う法的許可がなかった。

不法の身でありながら、彼は接着剤会社ではたらいた。年収は125000フラン。彼は1カ月1800フランの部屋に住んでいた。

彼は警察に監視される身だった。逮捕されることがの恐怖が頭から離れなかった。

彼は会社にも昔の書類を提出し、1日2日後には許可証が更新されるから、と言った。こ

れはうまく行った。そして3-4カ月が経過した。だが彼は再び許可証を提出しなければならなかった。

彼はパリ19区スターリングラードのカフェに行き男と会った。不正入手の本物の許可証が20000-25000フラン、文字通りの偽物ののが2500フランだった。彼は後者を選んだ。

彼は仕事はちゃんとこなした。彼は良いプログラムを組んだ。だが彼は非合法の身だった。同僚の目の前で尋問され逮捕されることを恐れて、彼は同僚と食事やお茶に行くことを拒んだ。家と会社との往復。そして上司との衝突。その後も彼はクリスチャン・ディオールでのアナリスト＝プログラマーの3カ月、オスマン大通りの大企業での6カ月、と仕事をこなしていった。彼は定期的に社会保障の掛金を支払い、後者の企業をやめる際には、身元を調べられることを恐れ、月給1.5カ月分の一時金で妥協した。彼は次のように述懐している。「偽の許可証を使用したからといって、盗むためにやったのではない。働くためにやったのだ。」

1992年6月、大学入学資格試験に合格したアストゥーと彼は結婚した。彼が不在のまま、ダカールにて式は取り行われた。15000CFAフランのワイロで1カ月の観光ビザを入手し、彼女は渡仏、2人の新婚生活が始まった。

再び掃除会社での仕事。2週間の契約。6時から正午まで、そして17時30分から23-23時30分まで彼は働いた。月収は2000-3000フラン。偽の許可証で働いていたので彼は同僚が信用できなかった。アストゥーと彼は本国の家族に定期的を送金した。彼は行政官に告発されるかもしれない、強制国外退去を命じられるかもしれない、という恐怖に付きまと

われていた。

彼はコンピュータの国家資格を取るためにさらに勉強することにした。それさえあれば仕事があったのだ。

次の職場はダイエット関連の会社だった。そこで雇い主の終業時の掃除要求を彼は断固拒否した。

その間、妻の妊娠、路上での尋問とそれに引き続く4時間の拘束の後の釈放、などが引き続いた。そして会社とのいざこざの後、彼は1994年10月に解雇される。だがその日国務院からの手紙が来た。再び彼は一時的に3カ月の滞在許可及び労働許可を得たのである。

そして1994年6月15日の娘ファトゥーの誕生。彼女が生まれたパリ東郊の町モンフェルメイユ市は、市長が移民の子供が幼稚園に登録することを拒否したことで知られていた。

そして1995年5月から7月までのアナリスト＝プログラマーの仕事につく。4時に起きて20時に帰宅する日々がつづいた。彼は1996年1月まで同様の仕事を続けた。

だが彼はこれ以上非合法のまま働きたくなかった。国務院での4年間は長すぎた。彼は1996年3月18日の朝パリ北東郊の町ボビニーの役所へおもむいた。だがうまくゆかなかった。彼は移民支援団体に窮状を訴えた。だがその反応ははかばかしくなかった。そんな中、彼はその日の夜23時、テレビで、アフリカ系移民がサン＝タンブロー教会を占拠したことを知った。そして彼はその運動の渦中へと乗り出していったのである。

歴史的コンテキストの中の移民

第3世界と旧宗主国との関係がどのように構造化されているのかが理解できよう。そして同時に、移民のおかれた社会環境がどれほ

ど劣悪かということも理解できよう。統計的に見ても、フランスの移民人口は総人口の7.5%で、その数は実に417万人にのぼる。そしてその出身地域は東南アジア・アフリカ・ヨーロッパと非常に多岐に渡っている。^{*2} しかも移民の仕事の大半は、彼が最初に経験した掃除夫のような公共の仕事ないしはエスニック・レストランの従業員等、特定の分野・職種に集中しており、彼らがいなくなれば、その分野・職種が機能を停止してしまいかねない、ということから考えて、政府が不法移民ゼロを実行することなど現実には有り得ない。そして雇い主はサン＝パピエを有利に雇用できる。^{*3} だがフランス政府は移民規制を訴えている。そしてサン＝パピエは生きるため非合法で働くことを余儀なくされる。

働くな、というのは生きるな、ということと同義である。そしてフランス政府はそれは法によって定められている、と言う。だが、その法の法たるゆえんが歴史的コンテキストの中では否定され得る、ということにフランス政府は気付いているのか。

かくしてサン＝パピエは植民地主義の所産であるということが理解でき、その限りににおいて、彼らの存在は決して否定されるべきではないと思われる。

サン＝パピエの運動の社会的意義

我々は本書の後半部分で描かれる運動において、注目すべき2つの要素を導き出すことができる。1つには、それはジョップの妻の父も属していた、アフリカ系旧仏軍兵士の墓に墓参しているということによって端的に理解できるように、彼らが、フランスによるアフリカの植民地支配という近現代史の延長線

上に自らを位置づけている、という点である。彼らは過去から決して切り離されてはいない。そして第2には、そうでありながら、かれらがフランスの自由のために闘っている、と明言している、ということである。彼らが主張する定住権、反人種差別主義、移民非合法化停止、地方参政権を外国人に与えること等は、フランスが誇り唱道する人権思想そのものではないのか、というのである。

かつての植民地支配の記憶を決して忘れることなくかつ支配しかえすのではなく、かつての支配の側とさえ了解し合える場を創造しそこから現状を変革していこうとしているということ。これは植民地主義の下で育った次の世代以降の時代認識を示す具体的な事例として注目に値する。この認識を行った代表的な思想家にフランツ・ファノンがいるが、民族解放のために彼が唱えた暴力という思想は、ジョップの下では、運動にとって代わられている。^{*4} 国家により生きることの不可能性を宣告されたサン＝パピエにとって道は一つ、運動なのである。そしてその運動が不可能性を生きることである限り、そこには思想的な意義が存する。そしてそれは、フーコーの言い方を借りれば、「至上の法のモデル」ではなく「諸権力の諸関係」そのものを生きざるを得ない赤裸々な日常に他ならない。^{*5} そしてそれがじつに膨大な人間的努力を要することか。サン＝パピエは、法により生きることが不可能だとされたが故にその不可能性そのものを生きているのである。

サン＝パピエの運動は現在も猶継続中である。ジョスパン内閣は移民規制法の見直しを行っており、フランスの世論は現在の時点では彼らに好意的である。^{*6}

ともかくそれはフランスだけの問題ではない。世界中に存在する複数の民族が共存する社会の歴史性及びそのコンテクストを問い直し、国家と管理の関係を問い直す必要が生じているのである。事態は、第3世界のみならず、かつての支配の側の足下で進行している、ということを実に物語っている。フランスにおけるその一例として、この書物はあ

註

- *1 以下の文献を参照すること。梶田孝道、『統合と分裂のヨーロッパ』、岩波書店、1993年。梶田孝道、『国際社会学のバースペクティブ』、東京大学出版会、1996年。研究の方向性については、梶田孝道、『「民族・国家・エスニシティ」論の現状と課題』、『岩波講座現代社会学24 民族・国家・エスニシティ』、岩波書店、1996年、245-263頁。
- *2 p.15 & 19, *Les immigrés en France*, INSEE, 1997 (<<CONTOURS ET CARACTERES>>).
- *3 p.75, Emmanuel Terry, *La lutte des sans-papiers dans la société française*, in *Postcolonialisme* Nos 5-6, printemps 1997, Paris, Dédale.
- *4 Frantz Fanon, *De la violence*, in *Les Damnés de la terre*, 1961 (Gallimard, 1991, 63-141(<<folio>>))(鈴木道彦・浦野衣子訳、『地に呪われた者』、みすず書房、1996、35-103)。
- *5 p.239, Michel Foucault, *Il faut défendre la société, cours au Collège de France*, 1976, EHESS, Gallimard et Seuil, 1997.
- *6 サン＝パピエの運動の現在をインターネットで知ることができる。ホームページのアドレスは以下の通り。http://www.bok.net/pajol/